０８／１１／０２　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：アブラハムの救い２
聖書箇所：ローマ人への手紙　４章４－８節

信仰のみによって救われるという、これこそがあのルター、宗教改革者たちが掲げた標語、スローガンでした。というのは、この宗教改革以前の神学者たちは、神の義認の賜物をいただくためには、人は自分自身を備えなければならないとそのように信じ、そのように教えていたのです。つまり、神によって義と宣言していただくためには、神の恵みの先行的働きによって実際に義とされることが必要である、本当に義とされた人を神は義と宣言したのだとそのように教えていました。そこで、ルターやカルヴィンなど宗教改革者たちは「パウロはそのようなことを教えていない」と言ったのです。パウロが教えたことは「信仰のみによって救われる」ということでした。だから、こういう人になったから神は救ってくれるとか、完全に聖い正しい人になったから神は救ってくれる、義と宣言されるということでは決してないと、そのことをパウロはアブラハムを引き合いに出して教えようとしているのです。私たちはそのことを前回から学び始めました。
パウロはアブラハムを通して、救いに関して三つの大切な真理を教えています。前回、その一つ目を学び始めました。

☆アブラハムを通して教える救いに関する三つの真理
　１．　１－　８節、信仰によって救われる
　２．　９－１７節、恵みによって救われる
　３．１８－２５節、神の力によって救われる

１．信仰によって救われる　　１－８節
　１）救いは行ないによるのではない　　１－２節
　２）救いは信仰による　　３節
前回は１－３節を学びました。続いて、４節から見て行きます。
３）救いは報酬ではない　　４－５節
これは別の言い方をするなら「救いは行ないによるのではない」ということです。４節**「働く者のばあいに、その報酬は恵みでなくて、当然支払うべきものとみなされます。」**、分かり切ったことをパウロは敢えてここで記しています。皆さんもここを読んですぐにお分かりになったことでしょう。報酬のことが言われています。仕事において報酬は労働者の当然の権利です。自分の為した労働に対する当然の報いです。労働の対価として給付される金銭です。働いたなら当然それに見合った給料をもらうということ、これは報酬です。パウロが言いたいことは、そのことをわざわざ引き合いに出して、救いはそういうものではないということです。一生懸命働いてもらう報酬ではない、実は、救いは神からの恵みであると教えるのです。ですから、４節で報酬のことを話した後、５節では恵みのことを話します。５節**「何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。」**。先に見たアウトラインで９節からそのことは詳しくパウロは記して行きますが、救いは報酬ではない、行ないではない、神から一方的に与えられる豊かな贈り物、恵みであると教えるのです。
今見たように、４節では報酬のこと、５節では恵みのことを言っていますが、私たちが見ているこの新改訳聖書には記されていませんが、５節の初めに「しかし」という接続詞が付いています。それによってパウロは明確に４節の「報酬」と５節の「恵み」とを対比しています。４節で使われている**「働き」**と５節にある**「働き」**は同じことばが使われていますが、意味が違うこと、指しているものが違うということに気付かれたと思います。なぜなら、４節の**「働き」**は一般的な仕事のことですが、５節で言われているのは救いに関する**「働き」**のことです。ですから、５節で言われているのは宗教的な働き、神の前に救いを得るために積み上げることができると思っている「徳」のことです。そして、この５節でパウロはもう一度人間の本当の姿を表わしています。私たちはどのような存在なのかということをここで二つ教えています。

◎人間の本当の姿　　５節
（１）働きによっては救いを得ることができない
どんなに頑張って良いことをしても、その働きによっては救いを得ることができない、それが私たちだとパウロは言います。**「何の働きもない者」**だと言っています。これは「働かない者」と訳すことができます。働きを否定するのです。救いのために何もできない人、救いを得るためにどんな働きもできない人、そのことをパウロは最初に**「何の働きもない者」**ということばで言わんとしたのです。どのような

行ないをもっても救いを得ることはできないということです。というのは、人間が行なうどのような宗教的な行為であっても、宗教儀礼に参加することであっても、社会における慈善活動であっても、人への善行も神の前には不完全なものです。私たちが人からどれほど称賛されるようなすばらしい行ないをしても、神の目にはそれは不完全なのです。聖い正しい神を満足させることはできないのです。ですから、どのような行為も救いを得るには不十分なのです。もうすでに２章で見たように、私たちが行なうすべてのことは、却って、神の怒りを引き起こすのです。２：５には**「ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。」**とありました。私たちは思います。これだけ立派なことをした、こんなにすばらしいことをしたから…と。しかし、神はあなたは間違っている、あなたが考えるどんなにすばらしい働きもすべて不完全であり、あなたはそのようして罪に罪を重ねて、実際のところは神の怒りを積み上げているのだと言われます。ガラテヤ人への手紙３：１０でパウロはこのように教えています。**「というのは、律法の行ないによる人々はすべて、のろいのもとにあるからです。こう書いてあります。「律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでもみな、のろわれる。」**と。つまり、もしあなたが行ないによって救いを得ようとするのなら、しっかりと知っておくべきことは、すべてのことを完璧に守り行なわなければならない、それが条件だということです。そんな人がいるでしょうか？考えることも行なうことにおいても、すべてのことが完璧に神に喜ばれるような人です。だから、それを行なわないのなら、あなたはのろいのもとにある、神のさばきのもとにあると言うのです。自分のことを正直に知っている人なら、このみことばを見たとき、そのことに気付くはずです。私は神ののろいのもとにあると。だれも神の前に完璧な行ないを為すことはできない、そのことをパウロは私たちに教えるのです。私たちはそのことを知っていても認めたくないのです。

（２）神に対して逆らい罪を犯している

５節に**「不敬虔な者を」**とあります。不信心な者、神を敬わない人、神を畏れかしこまることをしない人です。この５節のみことばを見るとき、私たちはあることに気付きます。パウロは明らかにアブラハムのことを話していました。前回見たように、ある人たちはアブラハムはすべてにおいて完璧だったと信じ、そのように教えていました。しかし、聖書はそのように教えていません。なぜなら、この**「不敬虔な者」**の中にアブラハムも含まれているからです。もし、アブラハムが例外ならそのように記したはずです。すべての人は救いに関して**「何の働きもない者」**なのです。そのことは聖書が私たちに教えています。アブラハムの不敬虔さです。信仰の父でありすばらしい信仰者であるアブラハムも実は罪人であったということを聖書は教えています。思い出してください。カナンに向かって旅をしていたアブラハムの一行が最初に到着したところはシェケムでした。そこで彼は主にお会いします。これは創世記１２章に出て来る記事ですが、その後彼らはネゲブの方に旅を続けて行きます。そこに着いたとき、その地方は飢饉でした。そこでアブラハムの一行は約束の地ではなく南の方、エジプトへと下るのです。それだけでも神がしなさいと言われることに彼は逆らったのです。神が言われたことを信じて行なうより、自分の目で見てどちらが良いのかを考えて自分が良いと思うほうを選択したのです。エジプトに向かったときアブラハムが何をしたのか？思い出してください。彼の妻サラ、その当時はサライと呼ばれていましたが、彼女は非常に美しかったので、アブラハムはきっとみながサライが私の妻だということに気付いたなら私を殺すに違いないから、妹と名のってくれと。そうして彼は偽りを選択するのです。それだけではありません。アブラハムが９９歳になったときのこと、サラはもう９０歳でした。子どもが生まれるという神の約束を信じ切ることができなかった様子、これは創世記１７章に出て来ます。ですから、あのように信仰的に立派なすばらしいすべての人々が尊敬するようなアブラハムであっても、聖書は私たちに、彼も私たちと同じように弱い者であり恐れる者であり、罪を犯した者だということが記されています。感謝です。聖書は真実を記しているのです。アブラハムがどのような人物であったのかということを知りたければ、私たちは聖書を見れば分かります。このような人だったのです。だから、パウロはこのアブラハムも実は**「不敬虔な者」**であったと言うのです。

すでに見て来たローマ３：１０には**「義人はいない。ひとりもいない。」**と記されていました。同じ３：１２では**「善を行なう人はいない。ひとりもいない。」**とありました。３；２３では**「すべての人は、罪を犯したので、」**と記されていました。まさに、その通りです。神の前に罪を犯していない完全な聖い正しい人など存在していないのです。これからも存在しません。人として生まれたすべての者は、悲しいことに罪をもって生まれ、神に逆らう者として生まれて来ているのです。そこに例外はないのです。パウロはこのローマ書１章で、繰り返して私たちに私たちの醜さ、罪深さを教えてくれました。１：２１から**「というのは、彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。:22 彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、:23 不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。」**

と記されており、神がいることを知っていながらその神を崇めていないと言います。不敬虔です。２５節にも**「それは、彼らが神の真理を偽りと取り代え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。」**とあり、３２節には**「彼らは、そのようなことを行なえば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行なっているだけでなく、それを行なう者に心から同意しているのです。」**と記されています。パウロは繰り返して私たちがいかに神に対して不敬虔な者であったのか、そのことを教え続けたのです。アブラハムもしかり、彼もそのような者として生まれ、神に逆らって来たのだと。パウロはエペソ人への手紙２：３で**「私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」**と教えました。かつて、救いに与る前の私たちは神に対して不従順であり、生まれながらに神のさばきを受ける者であったと言っています。

このローマ人への手紙を学んでいて、パウロが繰り返して私たちに私たちがどのような者なのかを徹底して教えようとしていることを知ります。あたかも、彼が私たち一人ひとりに「自分のことを正しく知りなさい」と何度も教え続けているようです。なぜ、それが必要なのでしょう？なぜ、私たちは自分のことを正しく知ることが必要なのでしょう？もし、私たちが自分のことを正しく知らなければ、イエスを信じていない私が永遠の滅びに向かっていることに気付かないからです。自分の罪深さに気付けば私にはさばきが待っているということに気付きます。だから、私たちは正しく自分自身の本当の姿を知らなければいけないのです。また、同じように、救われなければ取り返しの付かない大変なことになることを悟るためには、自分の罪深さを知ることが大切です。だから、「自分自身を知ること」は罪人に対する神のあわれみのメッセージです。そのときに初めて、私は罪が赦されなければいけない、救いを得ることが必要だということに気付くのです。

パリサイ人と取税人の話を憶えておられるでしょう？宮に上っていった二人、パリサイ人はみことばが教えるように**「自分を義人だと自任し」**ていたとルカの福音書１８：９に記されています。ゆえに、彼は**「他の人々を見下して」**いました。そのような人たちがいたのでイエスはたとえをもって話されたことがその後に記されています。二人の者が祈るために宮に上っていったというたとえです。パリサイ人は救いのために自分なりに良い行ないを守り行なっているとその行ないを自慢していました。１８：１１－１２**「パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。』**、私はこの横にいる取税人のように罪深い者ではありません、私はこのような罪を犯していませんと言います。それだけではありません。１２節には**「私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』**とあります。自分は義人である、自分は正しい、神に喜ばれていると、その根拠はこのような行為でした。取税人を見てください。１３節の最初に**「ところが、…」**と比較されています。**「取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。」**、なぜ、彼はこのようなことをしたのでしょう？彼は自分の罪深さ、汚れを知っていたからです。ですから、彼は聖い神のところ、天を見上げることができなかったのです。自分は余りにも汚れた者だと、そのことが分かっていたのです。しかも、彼の心は悲しみに満ちていました。さばかれて当然だ、神が私のような者にあわれみを示すことを拒まれたとしても当然だ、それほど私は汚れ切っていると、本当の自分の姿に気付いていた彼はこのように言います。**『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』**と。この願いが却下されても何も言うことが出来ない、彼ができたことは神のあわれみを乞うことだけでした。そこにしか希望はなかったのです。まさに、神の前に自分の罪深さ、本当の自分を知っている人の姿です。

ローマ４：５に戻って、**「不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、」**と、**「信じる」**ということばが出て来ました。神に信頼を置くということです。どういうことでしょう？もう私たちは繰り返し見て来ました。その復習です。私たちは先ず自分自身が本当に罪人であり、さばかれて当然であり、永遠に滅びるということ、しかも、私たちは自分で自分を救うことのできない希望のない者であると、そのことを私たちは心から認めることです。確かに、その通りだ、私はどうしようもない者、救いに関してまったく希望のない者だと。そして、イエス・キリストの十字架を見るとき、それは私の身代わりであり、イエスは私のすべての罪をその身に負って死んでくださったお方である、その死は私の過去、現在、未来のすべての罪のためであり、そして、イエス・キリストが死からよみがえったその復活は、彼が神であり、信じるすべての人の罪を完全に赦すことのできるお方である、ここに希望がある、この神が備えてくださった救いを私は信じ受け入れよう、神に逆らう生き方を止めてこの方を受け入れて、この方が言われているようにこの方に従って行こうとするのです。パウロが言うことは、その主を信じるならその信仰が義とみなされるということです。ただ、事実を認めるのではありません。事実に関する知識を蓄えるのでもありません。その事実を心から受け入れて、それに従って行こうとするのです。Ⅱコリント５：２１に**「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあ**

って、神の義となるためです。」とあります。５節でパウロが教えたことは、私たちは罪人であって、救いを得るためにどのような良い働きもできない、自分で自分を救うことができない者だ、しかも、私たちは不敬虔な者、神に逆らい続けている者、救いの希望などまったくない者、でも、そのような私たちを救ってくださる主イエス・キリストを受け入れるなら、私たちは神によってその罪が赦される、救いが与えられるということです。

◎ダビデ王によって救いを教える　　６－８節

そのことを話した後、６－８節でパウロはダビデ王を引き合いに出して同じことを教えようとします。６節**「ダビデもまた、行ないとは別の道で神によって義と認められる人の幸いを、こう言っています。」**、ダビデも同じようにこのように言っているとパウロは言います。**「行ないとは別の道で」**と、すなわち、「行ないに関係なく」、「行ないなしで」というように言えることばです。神が私たちの行ないに関係なくご自身の義を私たちの口座に入れてくださるという意味です。これまで見て来た通りです。「転嫁」ということばを話しました。国語辞典では「責任や間違いなどを他の人になすりつける」とありますが、神学的に言えば、何かを人の勘定に付けるとか、その不足を補う、だれかの口座に何かを入れること、それがこの「転嫁」という意味です。そのことはもう見て来ました。私たちが持っていない神に受け入れられる義というもの、聖さ正しさを神が私たちに与えてくれたのです。だから、神の前に立つことができるようになったのです。パウロはこのダビデのことを用いて、救いというのは神によって為されることであるとそのように言います。行ないとはまったく関係なく**「神によって義と認められる人の幸いを」**と言っています。なぜこのように言ったのでしょう？これまでも見て来たように、私たちはどんなに努力しても神が喜んでくださるような完全な行ないはできないのです。神があわれんでくださらなければ、神が助けてくださらなければ、私たちに救いはまったく不可能なことです。だから、パウロはここでダビデのことを話し、どのような人が祝された人か、どのような人がもっとも幸いな人か、それは神によって義と認められた人、罪赦された人、救いを得た人だと言います。

７－８節にダビデの救いに関する証があります。**「:7 不法を赦され、罪をおおわれた人たちは、幸いである。:8 主が罪を認めない人は幸いである。」**、どちらも「幸いである」ということばから始まります。マタイの福音書５章３－１１節で山上の説教の最初のところに**「幸いです」**ということばが９回出て来ます。このような人は**「幸いです」**と。これと同じことばが７，８節で使われています。

◎神に祝された人とはどういう人か？

（１）不法を赦された人　　７節

「不法」とは法を侮って犯すことです。神の法を侮りそれを犯していることです。そういう人を赦してくれる、この**「赦す」**はその人から去らせる、免除するということです。

（２）罪をおおわれた人　　７節

何かの上におおいをかける、上からおおうということです。ここで使われているギリシャ語のもとになっているヘブル語は、詩篇８５：２のことば**「あなたは、御民の咎を赦し、彼らのすべての罪を、<u>おおわれました</u>。」**と同じです。このことばはたくさん出て来ますが、たとえば、出エジプト記１４：２８に**「水はもとに戻り、あとを追って海にはいったパロの全軍勢の戦車と騎兵をおおった。残された者はひとりもいなかった。」**とあります。これはイスラエルの民がモーセに率いられて紅海を渡ったときです。そこで水はモーセの後を追って来たエジプトの**「全軍勢の戦車と騎兵を<u>おおった</u>」**と書かれています。この出来事、また、詩篇１０４：６，９にはノアのことに触れて**「あなたは、深い水を衣のようにして、地を<u>おおわれました</u>。水は、山々の上にとどまっていました。」**、**「:9 あなたは境を定め、水がそれを越えないようにされました。水が再び地を<u>おおう</u>ことのないようにされました。」**とあります。これ以外にも、エジプトの地にあって**「いなごが地の面を<u>おおい</u>、地は見えなくなる。」**（出エジプト記１０：５）とか、**「かえるがはい上がって、エジプトの地を<u>おおった</u>。」**（８：６）、**「それから、夕方になるとうずらが飛んで来て、宿営を<u>おおい</u>、」**（１６：１３）と何度も出て来ます。これは「神の完全な罪の赦し」のことです。地にあるものがおおわれて見えなくなったように神はその人の罪を完全におおってくださると言うのです。

（３）主が罪を認めない人　　８節

神は信仰者に罪を認めない、実は、ここに否定の単語が二つ並んでいます。ですから、それを入れて読むとこうなります。「主が罪を決して認めない人は…」と、否定を強調しているのです。つまり、神が罪を認めることは絶対にないということを言っているのです。神は信仰者に罪を認めない、もう神の目から届かないようにおおわれてしまっているからです。これだけではありません、救いのすばらしさは今度はイエスの義が私たちに与えられていることです。イザヤ３８：１７には**「ああ、私の苦しんだ苦しみは平安のためでした。あなたは、滅びの穴から、私のたましいを引き戻されました。あなたは私のすべての罪を、あなたのうしろに投げやられました。」**とあります。神はそのように罪人である私たちを扱ってくださるのです。神はもう二度と罪をご覧にならない、罪は完全に拭い去られたのです。神の目から未来永劫

に見えなくなっているのです。そして、決して神は私を罪に告発されることはない、私たちは罪から完全に救い出されたのです。詩篇１０３：１１－１３に**「天が地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。:12 東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。:13 父がその子をあわれむように、主は、ご自分を恐れる者をあわれまれる。」**とあります。神は私たちイエス・キリストを信じた者の罪を私たちから完全に離された、もう、私たちがさばきに会うことは決してないのです。ゆえに、神は私たち信仰者をご自身のものと見てくださるのです。

この７，８節のみことばは詩篇３２：１－５の引用です。特に、１－２節から引用されています。**「幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。:2 幸いなことよ。主が、咎をお認めにならない人、心に欺きのないその人は。」**、パウロはこのダビデのことを引き合いに出して、ダビデ自身も同じことを言っていると言いました。ダビデも自分の罪が赦されたことを神に感謝していました。今、私たちが見ているこの聖書の箇所はある出来事を指しているのであろうと言われます。ダビデの大きな罪、バテシバとの姦淫の罪、しかも、彼女の夫であるウリヤを殺害したこと、その罪に関することが記されていると私たちは見るのです。これはⅡサムエル１１，１２章に記されています。そして、詩篇５１篇でも、ダビデが預言者ナタンによって罪が示され、そして、彼がその罪を悔い改めたことが出ています。３２篇には三つのことばが記されています。**「そむき」「罪」「咎」**ということばです。ここでダビデは自分自身の罪深さを表わしています。自分がどれ程罪深い者かと…。

「そむき」＝神の命令に逆らって来た
「罪」＝神のみこころから外れて生きて来た
「咎」＝神の前に不正、不法を行なって来た

これらの罪をダビデは神の前に告白するのです。ダビデは自分の罪に気付いて、そして、その罪が赦されたことを喜んでいるのです。皆さん、罪の中を歩み神に逆らっている人には神の赦しがあります。赦された人はそのことを喜ぶのです。

今日のレッスンのまとめです。神はクリスチャンに対して大切なことを教えてくださった、それは「罪を悔い改めることの大切さ」です。もう一度、詩篇３２篇のみことばを見てください。３節でダビデは**「私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。」**と言っています。**「黙っていたときには」**というのはその罪を放置していること、自分の罪を神の前に改めないでそのままにしていることです。そのときに何が起こったのか？４節には**「それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髄は、夏のひでりでかわききったからです。」**とあります。

◎罪を放置していたその結果は？

（１）骨々は疲れ果てました＝からだから力が抜けてしまった
（２）重くのしかかり＝神の懲らしめがあって本当に苦しんでいる
（３）かわききった＝乾燥しきって夏のような状態だ

つまり、このような描写を使ってダビデが言うことは、罪を告白しなければその人のうちには喜びがなくなり、その重荷による辛さ、苦しみが増して行くということです。クリスチャンの皆さん、もし、あなたが罪を犯してそのままにしているなら、あなたは神との交わりを楽しむことができません。神のすばらしい祝福がないのです。ダビデはそのことを経験したのです。だから、ダビデはこのように証をもって、私たちにこのようであってはならないと悟らせるのです。

アブラハムとダビデ、彼らには共通点があります。どちらも神の恵みによってその罪が赦されたということです。そして、その赦されたものの反応は、赦されたことを知っていること、そして、赦されたことを喜んでいます。詩篇３２：１０には**「悪者には心の痛みが多い。しかし、主に信頼する者には、恵みが、その人を取り囲む。」**とあります。神は主の前に心から罪を悔い改めて主とともに歩む一人ひとりに、すばらしい祝福を与えてくださったのです。私たちの願い事がすべて叶えられたということではありません。少なくとも、私たちの心を神はそのように守り続け喜びに満たしてくださるのです。クリスチャンの皆さん、罪を放っておいて何の良いこともありません。あなた自身が苦しみ喜びはありません。しかも、あなたは無駄な時間を過ごしているのです。神の栄光を現わす生き方をしていないからです。

イエス・キリストを信じていない皆さん、もう一度、このローマ４：５－８を見てください。５節に**「…義と認めてくださる方を<u>信じるなら</u>、その信仰が<u>義とみなされる</u>のです。」**とあり、６節には**「…神によって<u>義と認められる</u>人の幸いを、」**と、８節にも**「主が<u>罪を認めない</u>人は…」**とありますが、これらは全部単数です。個人のことです。救いを得るのはあなた自身の決心、あなたの選択です。一人ひとりが神に対してどのように選択するのか決めなければいけないのです。神に逆らい続けるのか、それとも、自分自身がイエス・キリストを信じて救いに与ろうとするのかです。この救いは多くの人々のためです。しかし、その祝福をいただくのは信じた個人なのです。どうぞ、救いの機会があるうちにこの救いをお受けください。それがこのみことばが私たちにチャレンジしていることです。